

## タイ王室の政治的役割の変化：カンボジア 及びマレーシアとの比較研究

浅見, 靖仁 / ASAMI, Yasuhito

---

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

科学研究費助成事業 研究成果報告書

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

5

(発行年 / Year)

2016-06

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 9 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24530130

研究課題名(和文) タイ王室の政治的役割の変化：カンボジア及びマレーシアとの比較研究

研究課題名(英文) Changing Political Roles of the Thai Monarchy: A Comparison with Cambodia and Malaysia

研究代表者

浅見 靖仁 (ASAMI, Yasuhito)

法政大学・法学部・教授

研究者番号：60251500

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究プロジェクトでは、タイの王室の政治的役割について、カンボジア及びマレーシアの王室と比較しながら研究を行った。本研究プロジェクトでは、これら三国の王室の政治的役割の変化を相互に比較することによって、東南アジアの王室の政治的役割に関する「中範囲の理論」の構築を目指した。都市部と農村部の間にさまざまな格差が存在する状況で、「国民統合の象徴」として振舞いつつ、政治的影響力もできるだけ維持しようとしてきたこれらの三国の王室には、従来考えられてきたよりも多くの共通点があり、これら三国の王室間には緊密な情報交換が行われていたことを実証的な資料に基づいて明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：This research project aimed to construct "a middle-range theory" regarding the political roles of monarchies in Southeast Asia, by comparing changing political roles of monarchies in Thailand, Cambodia, and Malaysia. It revealed that, despite various differences in the socioeconomic background, the monarchies in these three countries had been facing similar obstacles, and there had been close interactions among them especially in the 1950s and 60s, though many of those interactions were intentionally kept low profile.

研究分野：政治学

キーワード：タイ カンボジア マレーシア 王室 君主制 プーミボン ラーマ9世 政治

## 1. 研究開始当初の背景

申請者は30年近くわたってタイ政治を研究してきたが、他のタイ研究者と同様に、王室の政治的役割に強い関心を抱きながらも、本研究プロジェクト開始までは、その分析には真正面から取り組んではこなかった。タイの王室の政治的役割について論じることが、タイ人研究者の間だけではなく、外国人研究者の間でも長い間タブー視されてきた。

しかし2005年以降タクシン派と反タクシン派の争いが激しさを増し、しかも両派の争いに王室が深く関与したことにより、そうしたタブーを破るような著作が欧米のジャーナリストや研究者によって相次いで書かれるようになり、またタイ国内でも王室の従来のあるあり方に批判的な意見を公に表明する者が少数ながら現れるようになった。

本研究プロジェクト開始前に発表されたタイの王室に関する研究は、1)これまで聖人君主として描かれてきた現プーミポン国王の負の側面を指摘することに力点を置いた研究、2)批判的な研究も行われるようになったことに対応して、現国王を弁護することに力点を置いた研究、3)王室の役割を現国王や他の王族の個人的な資質にのみ帰すのではなく、王室をとりまくさまざまなアクターのネットワークを重視した研究の3つのタイプに大別できた。1)のタイプの代表作としては、タイに13年にわたって住み続け、Far Eastern Economic Review という香港で出版されていた英語の雑誌に、タイ政治に関する鋭い分析記事を書いていた Paul Handley が2006年にYale大学出版会から出版した King Never Smiles: A Biography of Thailand's Bhumibol Adulyadej や、ロイター通信のバンコク特派員だった Andrew Marshall が、Wikileaks によって暴露された在タイ米大使館が本国に送った公電に書かれていたタイの王室に関する情報を基に、2011年にインターネット上に発表した Thailand's Moment of Truth: Secret History of 21st Century Siam などがあつた。2)のタイプの代表作としては、2010年に出版されたタイ人ジャーナリスト、ウィモンパン・ピットタワッチャイの "Ek Kasat tai Ratthathanun (偉大なる立憲君主)" と題するタイ語で書かれた三巻本などがあげられる。3)の代表作には、2005年に Duncan McCargo が Pacific Review という学術雑誌に発表した "Network Monarchy and Legitimacy Crises in Thailand" という論文があるものの、1)や2)のタイプの著作に比べるとまだその数は非常に少ない上に、その多くが印象論的な議論に終始しており、実証的なデータを、しっかりとした理論的な枠組みに基づいて示しながら議論を展開した本格的な研究はまだなされていなかった。1)と3)の中間的なものとしては、2011年に David Streckfuss が Routledge 社から出版した Truth on Trial in Thailand: Defamation,

Treason, and Lèse-majesté や Soren Ivarsson と Lotte Isager が編者となって、2010年にNordic Institute of Asian Studies から出版された Saying the Unsayable: Monarchy and Democracy in Thailand などもあり、特に Streckfuss の著作は、不敬罪については綿密な実証的な研究となっているが、王室の政治的役割の全体像を描くには至っていなかった。

本研究プロジェクトの研究代表者は、2011年8月に出版された『岩波講座東アジア近代通史10巻 和解と協力の未来へ:1990年以降』の中の1つの章として書いた「タイ:民主主義の揺らぎと王室神話の翳り」において、1970年代以降から現在までのプーミポン国王の政治的影響力の変化について、概論的ではあるものの、欧米の研究者の最新の研究成果やタイ人研究者との非公式の議論を踏まえて、ある程度の紙数を割いて考察を行った。また2011年9月に発行された雑誌『世界』に寄稿した「タイ 総選挙:農民の微笑と揺らく国王神話」と題する論文においては、2011年7月に行われたタイの総選挙が王室の威信に与えた負の影響について考察した。しかしながら、どちらの論考も一次資料に依拠したのではなく、概論的、あるいは仮説的な段階にとどまっている部分が少なくなかった。そこで研究プロジェクトは、タイでの現地調査によって一次資料に丹念にあたり、またカンボジアやマレーシアの王室のあり方とも比較研究することによって、タイの王室の政治的役割に関して比較政治学的観点から考察することを目指した。

## 2. 研究の目的

政治的理由からタイ人研究者が王室について自由に論じることが極めて難しい状況にある中、本研究プロジェクトは、カンボジアやマレーシアの王室と比較しながら、タイの王族の演説や地方行幸、各種王室プロジェクトの報道のされ方などを分析し、王室が作り上げようとしたイメージと国民が実際に抱くイメージの変化を実証的に明らかにすることを目指した。具体的には、1)王室及びそれをとりまくさまざまなアクターは、どのような「王室イメージ」を築こうとし、どのような政治的役割を果たそうとしたのか、2)そのために彼らはどのような行動をとり、どのような制度を作り上げたか、3)彼らのそうした試みはどの程度成功し、逆にどの程度自らが行った行動や自らを作り上げた制度の予期せぬリパーカッションによって、彼らが当初期待していたのとは異なるイメージが流布し、予期せぬ政治的役割を果たすことになったのかを明らかにすることを目的とした。

またその際、以下の2点において、タイの王室の政治的役割に関する先行研究にはない視点を打ち出すことも目指した。まず第1に、タイの王室をカンボジア及びマレーシア

の王室と比較しながら研究を行う点、第2に、比較政治学における制度研究の蓄積を踏まえ、タイの王室の政治的役割を国王や他の王族の個人的な資質のみに帰すのではなく、王室を1つの制度として分析を行うことである。この2つの特色は相互に関連もしている。国王や他の王族の個人的な資質のみに注目するのであれば、他国との比較の余地は少ないが、制度としての王室をどのように政治システム全体の中に位置づけるかという課題には、タイだけではなく、王室を抱えるカンボジアもマレーシアも直面している。カンボジアにおける2004年のノロドム=シハモニ国王の即位やマレーシアのマハティール政権下における国王やスルタンの政治的権限の縮小と経済的特権の維持の経緯を、タクシン政権下における王室の位置づけの動揺と比較検討することは、一旦確立された王室という制度に変更が加えられる際の、さまざまなパターンについての理解を深めることにつながる。王政は、世襲による継続を可能にするためには、個々の国王のカリスマに頼るだけではなく、国王や王族の権威を制度化しなければならない。しかし一旦一定の形の制度化が行われると、国王や王室を取り巻く状況が変化した時にも制度はすぐには変化できず、国王やそれをとりまくさまざまなアクターたちもその行動が制度によってさまざまな制約を受けることになる。しかし制度を新しい状況に合わせて変化させようとする、古い制度が作られた時とは異なるパワーバランスの中で、制度改変が行われるため、一定のリスクを伴う。そうしたリスクを最小限に抑えるために、制度は大幅な改革が行われる前にさまざまな微調整を繰り返すことになるが、そうした微調整は制度の経路依存性によって、実はその後の大幅な改革の方向に少なからぬ影響を与えることになる。こうした制度論的視点からもタイの王室の動きを分析することも本研究プロジェクトの目的の1つとした。

### 3. 研究の方法

タイ国立図書館に保管されている王室関係の記録集やマイクロフィルム化されているタイ字紙の記事に基づいて、1960年代から現在までの、タイの国王及び他の王族の主要演説や地方巡幸をデータベース化し、それらの演説や地方巡幸がどのような経緯で行われ、国民にどのように受け止められたのかについて重点的に分析した。またテレビや映画館で映画が上映される前に映し出される王室に関する映像も収集・分析したほか、バンコクで王室関係者に聞き取り調査を行うとともに、1960年代に王族が頻りに訪問したターク県において、一般住民を対象にした聞き取り調査も行った。

カンボジアとマレーシアにおいても、それぞれの国立図書館で王室関係の資料を閲覧した他、王室関係者への聞き取り調査も行っ

た。カンボジアでは、1950～60年代のシハヌークや他の王族に関する本や映像資料を収集している在野の研究者の協力を得て、国立図書館にも所蔵されていない資料を入手することができたほか、マレーシアでは、クランタン州のスルタンについて、複数の地元有力者から歴代各州スルタンと国王の関係について詳しい聞き取りを行うことができた。

### 4. 研究成果

本研究プロジェクトでは、タイの王室の政治的役割について、カンボジア及びマレーシアの王室と比較しながら研究を行った。従来これら三国の王室の政治的役割については、それぞれの国のみにも焦点をあてた一国研究の枠組みの中で行われることが多かったが、本研究プロジェクトでは、これら三国の王室の政治的役割の変化を相互に比較することによって、東南アジアの王室の政治的役割に関する「中範囲の理論」の構築を目指した。

本研究プロジェクトによって得られた「中範囲の理論」的知見の主なものは以下の通りである。

さまざまな違いはありながらも、これら三国の王室は、開発主義の時代において国民統合の象徴としての機能を果たすことを期待されたが、そのためには伝統文化の保護者として振舞うと同時に、ヨーロッパの王室との同質性も国民にアピールし、開発主義が目指すとされた「文明化」された状態をも体現するという、ともすれば相反する役割を担わなければならない。また「平民」が率いる政府との政治的駆け引きにおいても、王室の存続という至上命題と、王室の政治的発言力や経済的資産の維持・拡大という、往々にして両立することの難しい目標を追求しなければならない。東南アジアの王室は、こうした一種のジレンマに直面していた上に、王室内においても王族によって異なる思惑を抱く者がいたり、また作り上げようとする「王室イメージ」に王室と政府とのあいだにかなりの違いが生じたりすることもあったため、どの国においても「王室イメージ」は多面的、多層的なものとなった。

本プロジェクトが研究対象とした三つの国々は、社会経済状況や歴史的背景にさまざまな違いがあるが、それぞれの国の王室はある程度共通した課題に直面したため、王室が果たした政治的役割にも、またそうした役割を果たすために作り上げようとした「王室イメージ」にも、またその結果それぞれの国の人々が抱くようになった「王室イメージ」にも一定の共通点が見られる。

第一に、どの国においても、王室は、一般国民よりも西洋文化に精通していることを誇示すると同時に、その国の伝統文化の体現者でもあるというイメージが作り上げられた。どちらの面が重視されるかは、どの国においても時代によってある程度の変化があるが、どちらか一方のみが強調されたことは

ない。農村部住民に対しては、伝統文化の体現者である面が強調され、都市部住民に対しては、西洋文化に精通していることが強調される傾向がどの国でも見られたが、都市部住民のライフスタイルの西洋化にともない、近年は都市部住民に対しても、西洋文化に精通していることが強調される度合いは以前に比べると少なくなってきた。ただし欧米への留学経験があり、欧米風のマナーに精通し、ヨーロッパの王族と交流があり、英語やフランス語に堪能であることは、王族の威厳を維持するために依然として重要な要素となっている。

第二に、どの国においても、王室は、特定の民族だけではなく、少数民族も含めたすべての国民の統合の象徴としての役割を担われており、少数民族や多数民族であっても社会的、経済的に恵まれていない人たちのことを気にかけているというイメージが築かれ、それらの人々と面会して救いの手を差し伸べる様子が、繰り返し報道されたりしている。王室のこうした「慈善」活動の対象となるのは、辺鄙な農村に住む農民や山岳少数民族であることが多く、都市のスラムに住む住民がその対象となることは少ない。そこで強調されるのは、純朴だが貧しく無力な人々が王室の慈悲に感謝するという構図である。しかし恵まれない人たちの庇護者としての活動を王室がどの程度行い、またそれが官営メディアによってどの程度喧伝されるかは、国によっても、また同じ国でも時代によって大きく異なる。文化的役割と異なり、恵まれない人々に対する慈善活動は、時として、政権担当者の役割と競合したり、あるいは政権担当者の経済政策の批判とも受け取られたりしかねないからである。

開発に取り残された人々の苦しみに全く関心を払わず、王宮内で豪華な暮らしをしているだけでは、国民の多くが開発の恩恵をあまり感じられない状況では、王室はその権威を維持しにくい。しかし開発の恩恵にあずかることができない人々が大勢いることに焦点を当ててしまえば、開発の成果を誇示することによって「支配の正当性」を補強しようとする開発主義政権の担当者の威信を傷つけ、政府にとっては不都合なことになってしまう。政権担当者の側から見れば、王室の政治的発言力を弱めたいのであれば、恵まれない人たちの庇護者としての王室イメージはあまり都合のいいものではない。しかし、地方行政制度が未整備で、農村部が十分掌握しきれていない状況では、そうした王室イメージは、政治指導者にとっても都合のよいものとなる。特に農村部で共産主義勢力の脅威が深刻化した1960年代後半から1970年代の東南アジアにおいては、開発の恩恵を十分に受けられていない農民たちも国王を崇拜しているという言説を流布させることは、都市部住民の不安感がある程度やわらげる効果も期待できた。

しかし農村部での共産主義の脅威がなくなると、恵まれない人たちの庇護者という王室イメージは、再編を迫られることになる。タイでも、カンボジアでも、マレーシアでもそうした状況が1990年代以降生じたが、農村部での共産主義の脅威の消滅は、独裁政権の必要性を減じさせ、王室イメージの再編は、政治的な多元化が進行する中で行われることになった。単独のグループが権力を独占するのではなく、複数のグループが政権交代の可能性を持ちながら競合する状況においては、王室がどちらの陣営につくかが重要な意味を持つようになる場合もある。このため、冷戦後の王室イメージの再編は、このプロジェクトが研究対象とした三つの国では、複雑な政治的な駆け引きをともないながら行われることになった。

2014年5月のクーデター前後から、タイで生じている新しい動きを踏まえると、さまざまな違いを依然として抱えながらも、これら三国の王室の政治的役割は一定の収斂傾向を見せているように思われる。東南アジアに限らず、世界の他の地域についても、一定の民主化が行われた後の王室の政治的役割を本格的に比較した研究の蓄積はあまり多くなく、立憲君主制の比較研究のための理論的枠組みは非常に未整備の状態にあったが、2014年にAlfred StepanやJuan LinzらがJournal of Democracy誌上に"Democratic Parliamentary Monarchies"と題する論文を発表し、立憲君主制の比較研究のための新たな枠組みを提示した。彼らは主にヨーロッパと中東の立憲君主制を比較しながら考察を行ったが、彼らが提示した理論的枠組みは東南アジアの立憲君主制の比較にもさまざまな示唆を与えるものである。彼らは、ヨーロッパと中東という歴史的にも、文化的にも、社会経済的にも大きな違いを抱える2つの地域の君主制を比較したにもかかわらず、一種の収斂論を唱えている。

もちろん彼らは、現在存在している世界中の王室が1つのパターンに収斂していくと主張しているわけではない。まず彼らは民主化後も生き延びることができる王室と生き延びられない王室があると主張する。そして民主化後も王室が長期にわたって生き延びるためには、一定の条件を満たす必要があるため、民主化前の王室の多様性に比べると、民主化後は多様性が減少し、収斂の傾向がみられると論じる。民主化後に全く差異が消滅すると主張しているわけでもないし、民主化後も生き延びる王室は政治には全く介入しなくなると論じているわけでもない。実際、政治にあまり介入しなくなったといわれるヨーロッパの王室を見ても、政治に全く介入しないケースの方が稀で、さまざまなかたちで政治への関与は続いており、時として重要な政治的役割を果たすこともある。しかしそれでも王室が重要な政治的役割を果たすのは特定の状況に限られるようになり、また

影響力を行使できる王族の数は減る傾向にあると指摘する。

2014年5月のクーデター以降のタイで生じている王室をめぐるさまざまな動きは、長く王位にあったプーミポン国王の死後も王室を存続させるための、王室の政治的役割や王室イメージ修正作業としてとらえることができ、イギリスの政治学者 Duncan McCargo が、ネットワーク・モナーキーと名付けた隠然たる影響力を持っていた王室を中心とする非公式のネットワークを縮小させ、政治的役割に関しては、タイ王室の「カンボジア」化、あるいは「マレーシア」化を目指す動きだと言えよう。

しかしカンボジアやマレーシアにおいて、王室の政治的役割が縮小した際、王室内に抵抗しようとした勢力とそれを受け入れようとした勢力があったように、タイの王室やその周辺にも、王室さらにはそれを取りまくネットワーク・モナーキーの構成員たちの政治的影響力の削減を、受け入れようとする者がいる一方で、それに抵抗しようとしている者もあり、今の時点で、今後タイ王室の「カンボジア」化、「マレーシア」化が順調に進むかどうかを見通すことは難しい。

だが、おそらくは「カンボジア」化、「マレーシア」化以外には、タイで王室が存続し続けることは難しい状況になってきており、それに抵抗した場合は、Alfred Stepan や Juan Linz らが、中東のいくつかの王室について予想したのと同じように、王室にとっては、ソフトランディングよりも悪い結果を招く可能性が高い。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

浅見靖仁、タイの政治不安と王室、青淵(渋沢栄一記念財団発行) 査読なし、806号、2016年、pp.27-29

浅見靖仁、揺れ動くタイ政治：反タクシン派の「巻き返し」と「迷走」、世界、査読なし、853号、2014年、pp.29-32

[学会発表](計 2 件)

浅見靖仁、プラユット政権と王室：乱れ飛ぶ「噂」の政治学的分析、第16回日本タイ学会研究大会、2015年7月11日、東京学芸大学(東京都小金井市)

浅見靖仁、1950～60年代におけるタイの王室イメージの再構築：プーミポン国王の2つの顔、第90回東南アジア学会研究大会、2013年12月7日、東京外国語大学(東京都府中市)

[図書](計 1 件)

浅見靖仁 他、明石書店、タイを知るための72章、2014、pp.38-41, 354-357.

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

浅見 靖仁 (ASAMI, Yasuhito)

法政大学・法学部・教授

研究者番号：60251500